

THE SCOTTISH CLANS
&
THEIR TARTANS

スコット
ランド
タータン
の話



特243

298



0053843000

0053843-000

特243-298

スコットランドタータンの話

東洋編物工業

昭和12

AIB

特 243
298

本年は英國に於てジョージ六世陛下の戴冠式が行はれる故でありませう。歐州、米國に、全面的にスロツチタキヤン桶が使用されて居るやうであります。

我國でも三年前からチエツクが流行に乗り漸次複雑な線の交叉となつて愈々本年は本格的なタータンとなつて來ました。

タータンの線を手に入れば矢張り古いものゝ好きがわかるやうな氣がします。

彩を視つめてみると、流石に眞険にをのがちな氏族の彩を求めてやまなかつた、オールド・ハイランドの氣持になれたやうな氣がします。

曠野や連岳を見るやうな、素朴な牧歌をきくやうなもの、思はず襟を正さしめるやうな、典雅な聖歌の合唱をきくやうなもの、およそ、數々のゆめと望みとあくがれのリズムとトーンを奏てゐます。

私共は學者でもなければ研究者でもありません。唯の商賣人で職業のために線を求め、彩を求め、ハアモニイを求めたにすぎませんが、タータンに親しんでゐる裡に、何時かその情に魅かれる想ひで一杯です。



この簡単な譯本は大體 "The Scottish Clans & Their Tartans" からのもので、それに工業大學教授中原虎男氏の御藏書 (The Clans, Septs and Regiments of Scottish Highlands) から拔書さして戴いたもので吾々の製作したものを取扱つて下さる方々の、そのお忙しい時間に眼を通して戴いて御参考に供せればと存じましたが、線のみで彩が附いてゐないのは實にさびしいことです。

私の手元に下村正三氏を煩して實物大の線で素晴らしい彩のついたコレクションが御座います。

御望みの御方はどうぞ御立寄り御覽願ひます。

一九三七年五月

東洋編物工業株式會社にて

金 窪

スコットランド高原の衣服とその着方

現在着られてゐるスコットランド高原の衣服は、徐々に改良せられてきたものである。一六〇〇年以前のアイルランド及スコットランドのゲイル族の衣服はサフラン色のシャツである。フランス皇帝付き地理學者 M・ニコレ・ド・アファヴィレは十六世紀にスコットランドを訪れ「スコットランド人は、アイルランド人のやうにサフラン色の大きな丈一杯のシャツを着てゐる。そして、この上に厚い羊毛の膝まである衣服を袈裟のやうに懸けてゐる」と記してゐる。十七世紀の始め頃、このサフラン色のシャツを高原の衣服の一部と見做すことは止められ、ベルトのついた縞羅紗の肩掛と短袴が之にとつて代つた。

前者は短袴と肩掛の組合せで、十二エルのタアタン（一エルは三七・二吋で六エルの二重格子縞羅紗）で格好よく襷をとり、ベルトで身體のまわりを結び、下部は短袴になつて居り、上部はブローチで肩をとめて後に下げ肩掛になつてゐる。その組合せ方は、模様的配合と同じく相當の手際と巧妙さを見せることが出来るのである。

短袴は襷をとつた、六エルの一重のタアタンで、半ヤード宛兩端を、襷をどらずに置いて前で合はせ、腰の回りを革紐で締めるのである。これは全く近代的な型の高原服である。日常着の高原服は、短袴、短上衣、鹿角製のボタン付きの「丘陵格子縞」として知られてゐるスコッチ織のちよつき及び、頑丈な靴、さつぱりした靴下、靴下止め、やゝ「バルモラル型」を真似た帽子等から成立つてゐる。スポラン（短袴の前につける毛皮囊）は狐、猫といった風な動物の毛皮か頭で作られるのである。長さ四ヤード巾一・五ヤード位の、縫をつけた肩掛が高原の外套、つまり肩衣として普通の肩掛の代りに広く用ひられる。タアタンの短袴を、すこつち織の、短上衣とちよつきと共に用ひるのが一番正しいのである。短袴には腰のまわりにベルトをつけるべきで、ズボン釣りや、革帯を用ひるものではない。短袴は膝小僧の丁度真中位にくるべきもので、これを試してみるのに一番良い方法は、着る人が、地面にひざまづいてみる事である。この姿勢で短袴の裾が丁度地面に觸れる位が良いのである。短刀は、踏下の右脚外側につけられる。帽子には被る人の紋章を示すブローチをつけても良いが、普段着には裝飾の少い程良いとされてゐる。

信すべき典據に従へば「盛装」の高原服は、正規のタアタンで作つた短袴と肩掛、及タアタンの編物か、正しい割合で色の浮出たチエツクのめりやす製の靴下、菱形即ちダイヤモンド型の銀ボタンのついた天鷲絨か、タアタンの短上衣（若し普通平民に用ひられる前のひらいた短上衣を着るならば、ちよつきは、深紅色か白か若しくはタアタンのもの）、それに、短靴、山羊の毛皮囊、紋章と徽章のついた帽子、肩掛を止めるブローチ、腰に締めるベルト、及巾の広い刀劔つり等から成り立つてゐるのである。武器は、闊刀（スコットランド特有の巾の広い刀）及短劔、短刀、一對のピストル、鹿角製火薬入れ等である。

短袴——若し、或る氏族の人が、「氏族」「獵」「盛装」等の如く、種々の場合のタアタンを持つてゐる時には、それ等のうちのどれを用ひても、又は「氏族」の「獵」の組合せを用ひても良い。勿論「盛装の場合」には「盛装」タアタンが、普通用ひられる。若し氏族が或る種族に屬してゐて、種族に特別のタアタンがない場合には、己れの氏族のタアタンを用ひるべきである。若し種族が特別のタアタンを持つてゐれば、それを着るべきである。特別の「盛装」の場合でなければ、氏族タアタンの短袴と、獵タアタンの肩掛と云ふ風に、己れの「氏族」のタ

アタンの組合せを着ても宜しい。

「氏族」のでも「獵」タアタンでも「盛装」タアタンと組合せるのは正しいとは思はれない。

若し「盛装」タアタンを着る時には、短袴も肩掛も靴下も揃つてゐなければならぬ。

肩掛——肩掛は長いものが着られるべきであるが、四角なショール肩掛が特に舞踏場のやうな所では許される。踏下は、短袴と肩掛に良く適應したものでなければならぬ。長い肩掛は刀帯の上から着るもので、舞踏場では脱いで了ふものである。

帽子——帽子は「バルモラル」型と同種のつばの廣い青いものを用ひるべきである。「グレンガリイ」帽子は一世紀ばかり前に使はれた新しい發明品で、「默認」されてはゐるが、正しい様式であるとは考へられない。帽子には、被り手の氏族の標語のついた紋章や、その氏族又は種族の常盤木の徽章をつける。

靴下止め——ガーターとしては、巾一インチ位の深紅色の毛糸のレースで結ぶのが正しいのである。ゲイリツク語で *Snaoin garlain* (ガーター結び) と云ふ特別の結び方がある。新しく發明されたバラ色のガーター飾りがあるが、正しい物とは見做されてゐない。

短上衣——ジャケット、即ち短上衣は概に述べた如く、びらうごか、羅紗か、斜に斷つたタアタンで作られる。短上衣は正しい高原の型でなければならぬ。最も古い型のは *Cola gearr* で、普通の「燕尾服」と良く似てゐるが、もつと尾を短く斷つもので、或は普通の狩獵服に似てゐると云つた方が近いかも知れないが、もつと短くて高原型のポケットの垂れと袖口がついてゐる。ボタンは菱形つまりダイヤモンド型のものでなければならぬ。ボタンのない短上衣は軍隊で用ひられ、前の開いたのは多く平民に好んで用ひられた。

毛皮囊——總のあるのや、ないのや、黒、鼠、白等の山羊の皮の毛皮囊があるが、總のあるものの方が完全なものであると見做される。毛皮囊の袷装はその氏族の標語と紋章を示し、その上の飾りはケルト風に工夫すべきもので、ブローチ、ベルト、しめがね等でとめるのである。

靴——靴は短靴でなければならぬが、普通びちようを使ふことは許される。斯うしたものを身につける時は、びちよう、紐などの飾りをよく調和させなければならぬ。

ベルト——刀帯等は、黒皮の紋章入りのもので、びちようには裝飾をつける。

闊刀其他——闊刀は衣服とよく調和した、深紅色の羅紗かタアタンで包んだ籃柄に入れる、

二重溝の刀身のものである。短剣は正規の型のもので、一定のケルト風の装飾を施したもので、短剣も短剣と同じ型に工夫されたもので、正規の型のもの。

ピストル其他——正規のピストルは一連發前装銃で、銃身に撞桿のついてゐる、ベルトづきの古い型のピストルである。鹿角製火薬入れは右側に、口金は前につける。

装飾——装飾は腐刻法か、彫刻に依つて浮し彫りにすべきものである。装飾は、靴のびぢやうと紐。腰のベルトや刀帯と同じく正しい紋章を表す毛皮裏。正しい紋章と標語を示す帽子の飾り。ケアンゴーム水晶や、他の寶石の肩掛止めのブローチ及、びぢやう等の一定の飾り、から成り立つてゐる。

徽章は主として馬の前額部の飾りにしたもので各氏族特有の植物や花（例へば松、ヒース、柘えにしだ）等の類を模様としたものである。

總括——衣服全體は一樣に統一されて見えなければならない。武器や飾装は同程度の立派さでなければならず、装飾の圖案として同様である。衣服の着手は極く自然に振舞はなければならない。

又、手袋は高原衣服には含まれて居ない。

過去には是等は總て高原衣服の構成要素と考へられてきたが、近代に於ては、その内の多くは好戦時代の殘餘と考へられ、使ふことを止めて了ふ傾向がある。近年に至つては衣服の澁い型が喜んで用ひられ、好戦の表徴は漸次姿を消し、刀劍、ピストル、鹿角製火薬入れ等はや、衣服の必要な要素とは考へられず、装飾もすつと和げられてきた。「高原中の最良の衣服の着手」を競ふことは止められ、ゲエル人の繪のやうな衣服は幽雅な簡素なものに代つた。

斯うした歴史とローカルカラーに富んだ美事なタータンが、之に依つて、各氏族の團結力が愈々強くなると云ふ見地から、一七四七年の叛亂に原因して一七四七年舊曆八月一日に議會を通過して禁止令が下された。

斯うしたことから實に莫迦げた次のやうなお祈りの言葉さへ出たと云ふ事が記してある。

「私は神の嚴かなる審判の日に誓ひます。私は自己の所有物の中に鐵砲も劍もピストルも武器と名のつくものは一切も持ちません。また持たうとも致しません。タータンは着物の如何なる部分にも決して用ひません。若し、私がこの誓を破り犯しましたならば、私は遠い遠い海

の彼方に追ひやられ、妻も子も、父も母も、親類も見事が出来なくなつてもかまひません。或は戦場の憶病者として殺され、祖先の墓から遙に遠い異郷の土に、しかもキリスト教徒としての式さへ行はれずに葬り去られやうとも、それは私にとつて當然の事でありませぬ。

おゝ、若し、私がこの誓を破りましたならば、世の總ての災よ、のろひよ私の上にふりかゝつて來よ……」(Dr. James: History of the Highland Clans.)

斯くて一七六三年から一七七五年迄の間には尠くとも二萬以上のスコットランド人が祖國の壓政に耐へかねてアメリカやカナダに移住して了つたと云ふ事である。

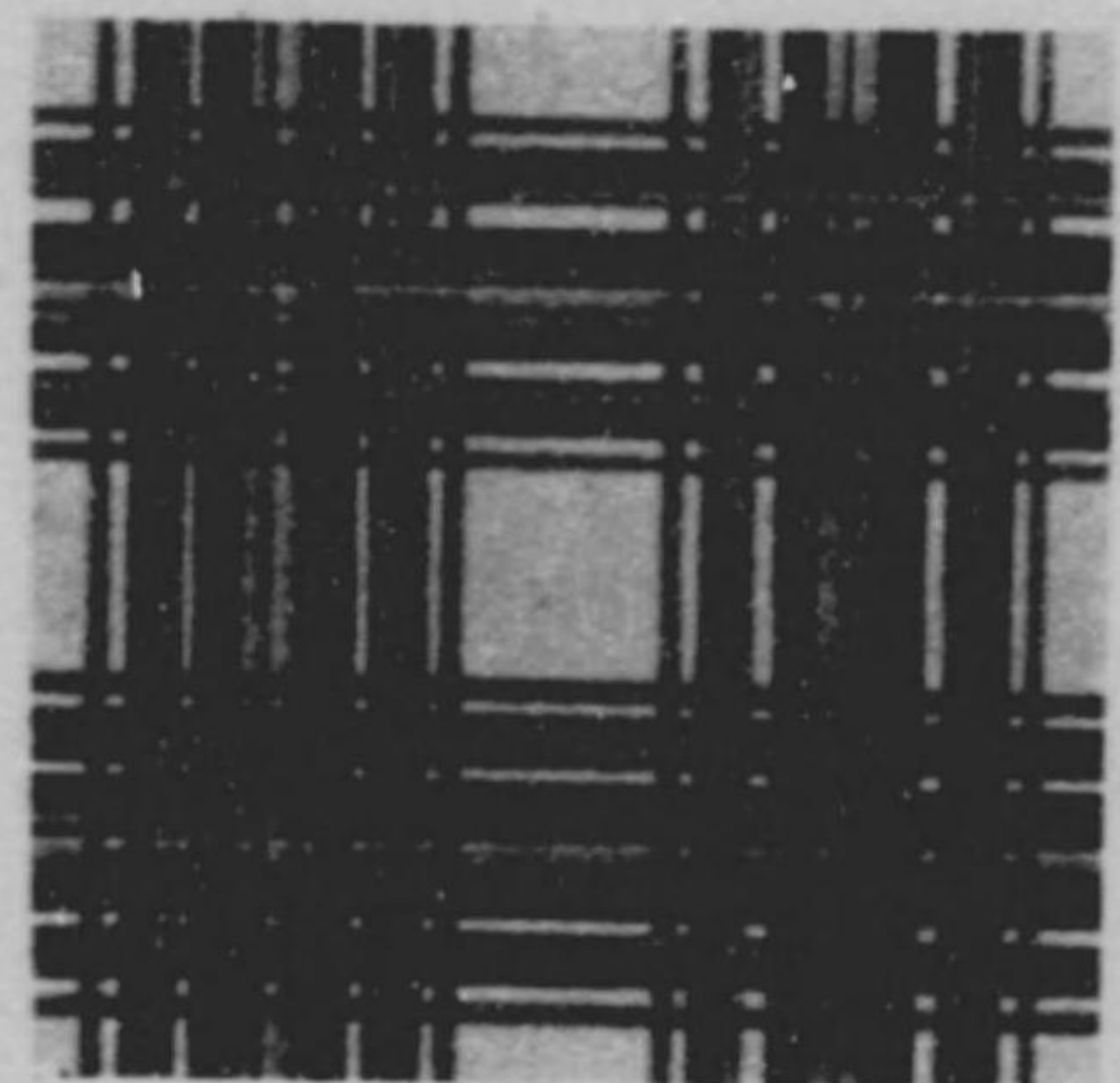
この禁止令は一七八二年に至つてモン트로ーズ公に依つて解かれたが、その時にはクランの領主の大部分は南スコットランドに移り、或者はクランを解散し、家臣を追ひ出して羊の牧場にして了ふと云ふ始末で多くの人々は海を越えて西部に去つて了つた。一方軍事用の道路が完成し、交通が發達し個々に特性を持ったクランの力は次第に衰へて了つた。

十九世紀の中葉に於ては、クランのシステムと云ふものは殆、忘れられて了つたと云はれてゐる。然し、その子孫達の間には祖先の武勇の物語りを聞き傳へ、自分の祖先の屬した氏族を

求めクランタータン、クラン・バツチを慕ふと云ふ氣運は永久に失はれず、近年になつて又クランタータンが返り見られるやうになり、前に叛亂に依つて混亂に混亂を重ねたクラン・タータンの研究が完成し、英國殖民地やアメリカにはタータン協會が生れ、獨りスコツチハイランダーばかりでなくタータンはスコットランド全體のシンボルのやうになつた。

「氏族」

ロイヤル・ステュワート



徽章——櫛又は薊、現在の蘇格蘭の國章

この立派な王室の一門の祖先は、ブリタニイの古代伯ドル及デイナの次子、アランと云ふブリタニイ貴族であつた。イングランドに渡つて、彼はヘンリー一世に依つて、シロブシエアのシエリフを命ぜられ、三男のウォルター・フィツアランが、ステュワート家の先祖となつた。

ウォルターは英蘇國境を越え、デヴィッド一世王からスコットランドの大ステュワードの位を授けられた。

この地位はその後、この家系の世襲のものとなつたのである。三世ステュワートのウォルター

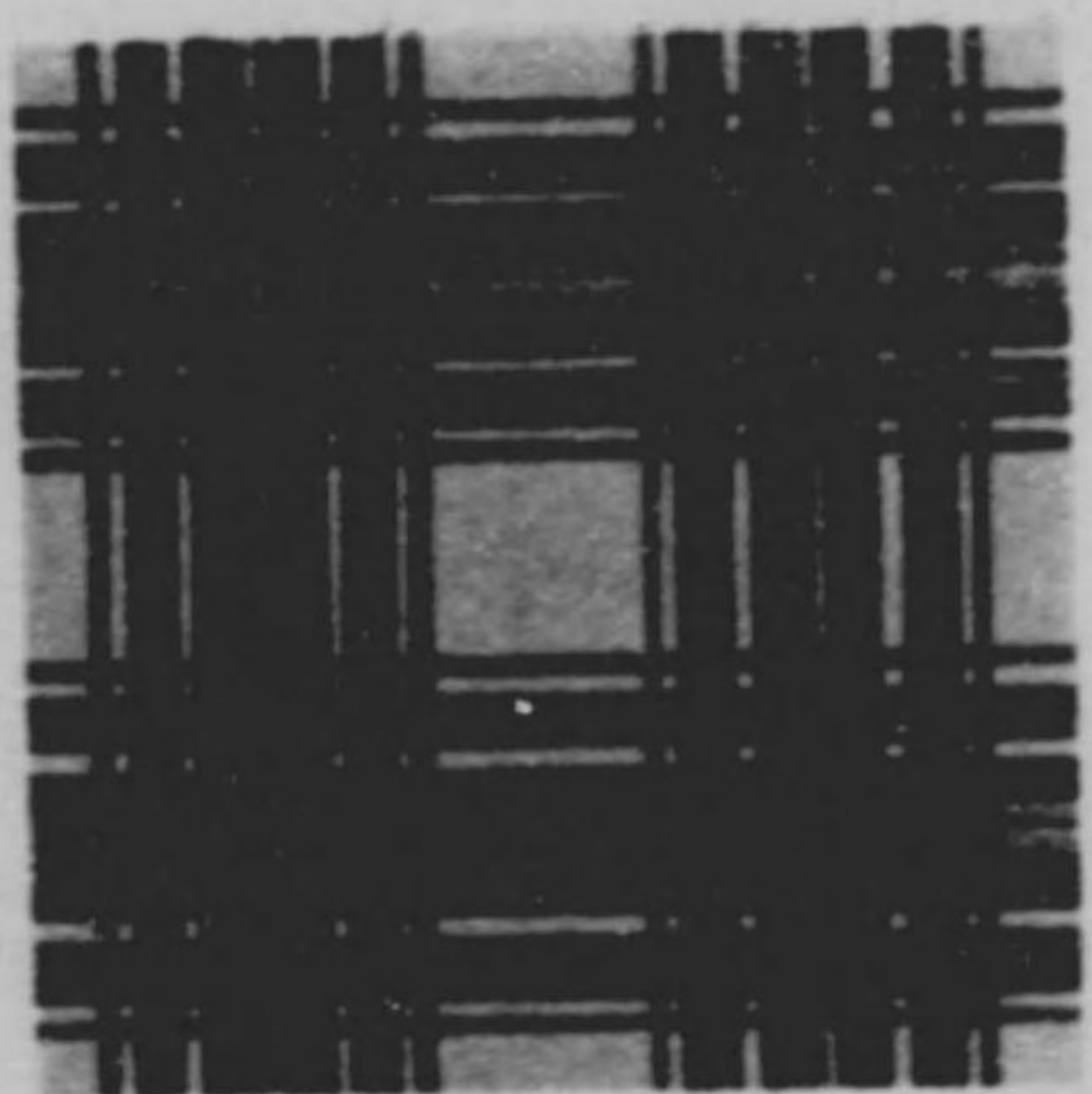
は、彼の家の姓として役の名前を執つた。

六世ステュワート・ウォルターは廿一の時に彼の屬領をバナックバーンまで擴げた。翌年彼はマージョリー・ブルウス姫と結婚し、遂にはロバート二世として王座についたロバート云ふ一人息子を得た。

ロバートは多くの男の子達を生んだが、現在では正統の男系の後裔は一人も居ない。直系の男系はジェムス五世を以て全然絶へた。彼の娘メリイはロード・ダアンレイなる、ヘンリーと結婚した。ヘンリーはボンキール分家の首席男系代表者であつたので、この婚姻に依つて、その子ジェムス六世は（父を通じて）スコットランドの内大臣の男系嗣子たるのみならず（母を通じて）主系の繼承人たる血統であつた。男系の後繼者はプリンス・チャリーイと、その弟デューク・オヴ・ヨークの死に依つて再び絶へた。

エディンバーにはステュワート・ソサエテイがある。

ドレス・ステュワート



このタアタンは、如何なる憑據か判然しないが「ステュワートの禮服」と名づけられてきた。それは勿論、今ではないが宮室赤タアタンは「オールド・ハンティング」等々のタアタンが、大抵普通の場合に使はれてゐるのに對し、禮装とか儀式の場合に用ひられてゐた。チャールス二世は時々これと同じ、タアタンの肩ショルダー、ノット結びを着てゐたと

云はれてゐる。それがこの名の起因となつたのであらう。それが今日ステュワート・タアタンとして著名になつたのは、ヴィクトリア女王殿下のお蔭である。スコットランドのジェムス四世即ち、イングランドのジェムス一世は、他の子供達と共に、ラインの選皇帝バヴァリア公爵フレデリック五世と結婚したエリザベスと云ふ娘を残した。その末娘ソフィアは一六五八年に、ハノヴァの選皇帝、フランスウイック・ルネンバーグ公エルンスト・オガスタスと結婚した。この選皇帝の息、ジョージ・ルイズはジョージ一世として、大英國及アイルランドの王となり、後にジョージ二世となつた子息を残した。彼は十三人も子供があつた彼の孫、ジョージ三世に繼承された。内二人はジョージ四世、ウヰリアム四世の稱號の下に王座に就いた。ジョ

一チ三世の四男ケント公爵エドワードは、ザクス・コブルグ・ザールフェルト公、フランシス殿下の息女ヴィクトリア・マリイ・ルイザと一八一八年に結婚した。彼の娘アレキサンドリイナ・ヴィクトリアは、彼女の叔父ウキリアム四世の死に依り、クニン・ヴィクトリアとして一八三七年六月卅日に王座に就いた。今年戴冠式を挙げさせられるキング・ジョージ六世陛下は、このステュワート家の分家の代表であらせられる。

フロデイのプロデイ家

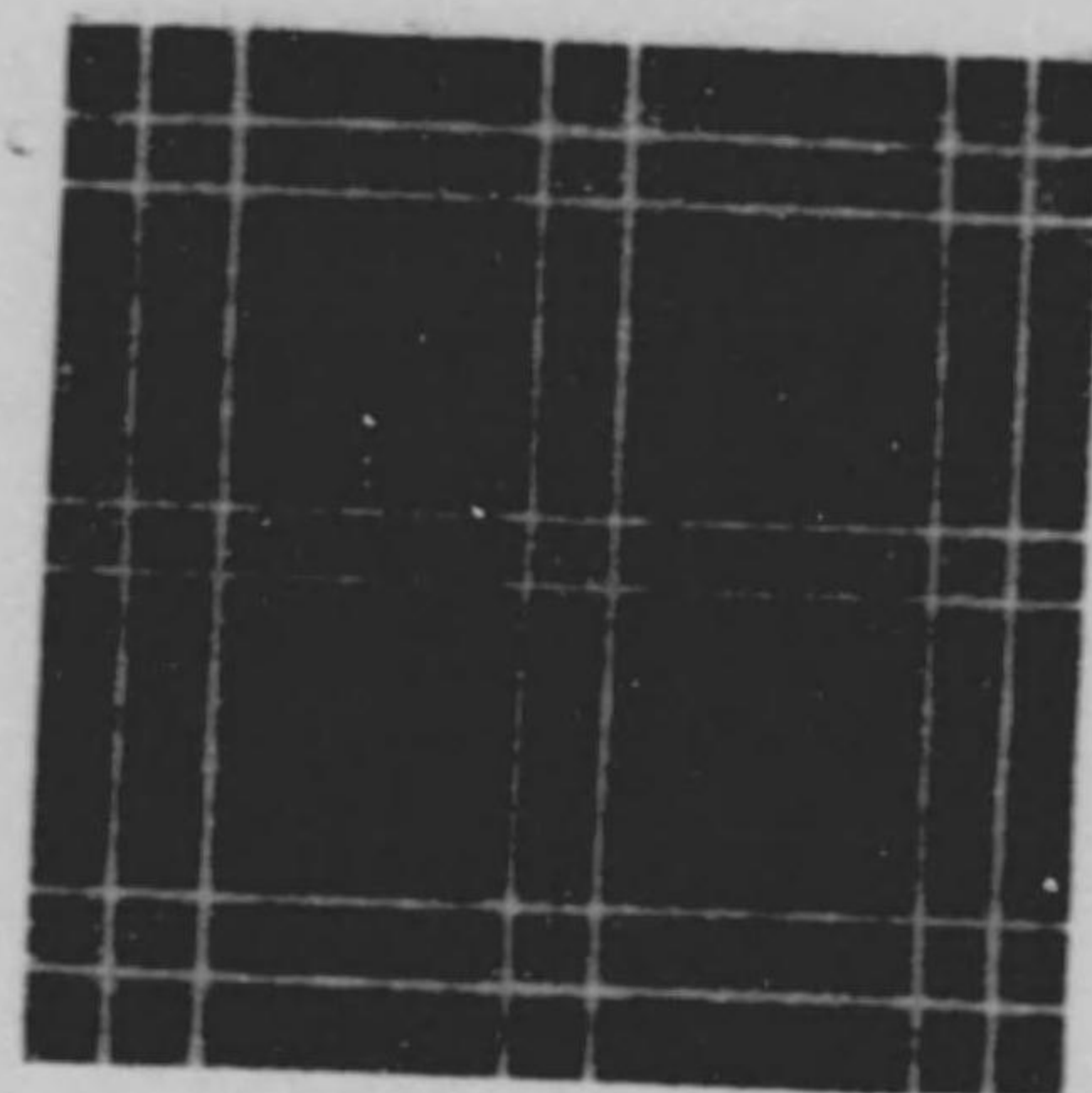
この名は地方の土地の名のプロデイ(ゲイリツク語の Brothach)からきてゐる。この家に就いての古い文書は、後にハントリイ侯(三世)となつたルイズゴードン卿のプロデイの家が、一六四五年に焼けた時に、持ち去られたり焼け失せたりして了つた。

アレキサンダー三世王の時代に生活してゐた、フロデイの貴士マルコルムから、大審院判事としてフロデイ卿と尊稱されたフロデイのアレキサンダー・プロデ

イが出た。彼は一六一七年に生まれた。彼の息にして後継者なるブデロイのジエムスプロデイは一六三七年に生まれ、一六五九年ロシアの三世伯ウキリアムの娘メイリイ・ケア夫人と結婚した。九人の娘を残したが子息は一人もなかつた。彼はアスリスクのヨセフ・プロデイの息ジョーヂ・プロデイと云ふ彼の従弟で、フロデイ卿の兄弟であるフロデイのデヴィド・プロデイの孫に継承された。一六九二年彼は彼の前主の五番娘エミリイと結婚した。彼は三人の息子と二人の娘を残して、一七一六年に死んだ。長男で後継者であるジエムス・プロデイは若くして死に(一七二〇年)、一六九七年生れのアレキサンダーと云ふ彼の弟が後を嗣いだ。彼は一七二七年スコツトランドのリオン卿に任命され、一七五四年に死んだ。彼は妻メリイ・スレイに依り、彼の後継者アレキサンダーと云ふ一人の息子と、エミリアと云ふ一人娘を得た。フロデイのアレキサンダー・プロデイは一七四一年に生まれ、一七五〇年に死んだ。而してスピニイのジエムス・プロデイの息子で、彼の二番目の従弟ジエムス・プロデイに後を継がれた。この人はナイアンの副領主で、一七四四年に生まれ。ファイフの初代伯ウキリアムの末娘、マー

ガレット・ダフ夫人と結婚した。彼は一八二四年に死に、二人の息子と三人の娘を残した。その息子ジエムスは二人の子息と五人の娘を残して、父親の生存中に溺死した。その長男ネアンシアの副官、モレイシアのブロデイのウキリアム・ブロデイは、一七九九年に生まれ、一八二四年一月彼の祖父の後を継ぎ、一八三八年に故陸軍大佐ヒュー・ベイリーの三番目の娘エリザベスと結婚した。ヒュー・ベイリーはレツド・キャツスルの議員で、一八四〇年に生まれ、一八八九年に死んだヒュー・ファイフ・アシュレイ海軍少將を生んだ。この家族の現家長は、一八六八年に生まれたネアンシアの副官ブロデイのアイアン・ブロデイ参謀である。此の氏族の他の分家は、レゼンのブロデイ及イースト・ポーン・サセツクスのブロデイである。ブロデイは一八三四年に従男爵となつた。

グレイアム氏族



徽章——月桂樹

此の姓が最初に現れたのは一一四三年から四七年頃のデヴィド一世のホリイルド許可状の證人の一人ウキリアム・オブ・グレイアムの時であるやうに思はれる。彼は後にアバーヨーンとゲルキースの土地を得た。彼の孫にして、この家の代表者なるデヴィド・グレイアムは一二二四年以前にウキリアム・ザ・ライオンからモントローズの近くの或る土地を得た。デヴィドの子は、ダムバー伯バトックから貰つたギヤロウエーの彼に屬する土地と、ダングラフ及マグラクの土地を交換した。

彼の息ダングラのサー・デヴィドはストラサーンの伯爵の娘と結婚し三人の息、サー・バトリック、とジョン卿とデヴィド卿を得た。サー・ジョンは志士ウォレスの「右手」と云はれた。彼は一二九八年フォルキルクの戦鬪で斃れた。

サー・ウキリアムは、ロバートからアルバニイ公爵を授けられ、許可状にはオールド・モントローズの世襲財産を含んでゐた。彼の孫バトリックは一四四五年頃ジエムス二世、グレイア

ム卿を授けられた。

三世卿は一五〇四年ジェムス四世に依つてモントローズ伯爵を授けられた。彼は一五一三年にフロデンで斃れた。ボーダーのグレイアム家は後にメンティス伯となつた、ストラサーン伯マリイズの次男、キルブライドのサー・ジョン・グレイアムから出てゐる。サー・ジョンはパースシアアのガアトモアのグレイアムの先祖であつた。

高原の人々は、高原の服装の使用に對する刑罰である一七四七年の不名譽な法令が一七八二年の議會を通じて廢棄されたについては、グレイアム侯(後のモントローズ公)に負ふ所が多い。

此の氏族の主長は、グレイアム公爵(ジェムス・グレイアムC・B、C・U・O、V・D)である。

ガン氏族

徽章——ネズ(杜松)又は昨葉荷草^{ツブレング}

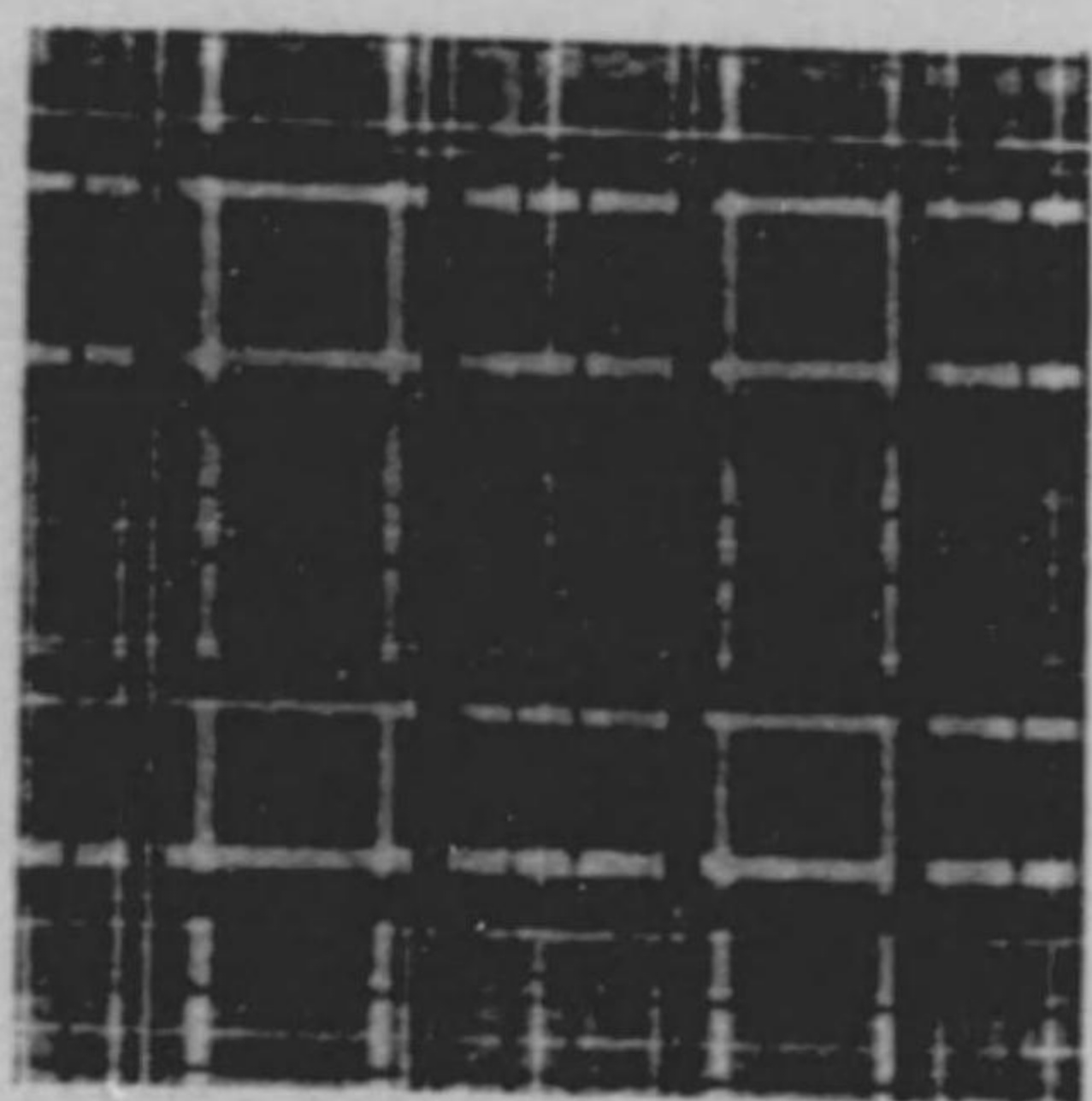
此の一門は諾威人の出である。ガンはケイスネス及スザランドの好戰的な氏族で、その名は諾威語の Gunnr 即ち「戦ひ」から出てゐる。

ガン家とケイス家は始終敵意を抱いてゐた。ブラエマアのラクランガンは、美人で有名な一人娘があり、その従弟アレキサンダーとの結婚の日取が定められたが、彼女に言寄つたのを拒絶されたアカアデイルのケイスの郎黨ドガルド・ケイスが武装したケイス家の一體と共に彼女の家を取囲み、襲撃に供へてゐなかつたガン家の多くの者を斬殺して娘をアカアチルに連れ去つた。そこで彼女は誘拐者の犠牲となり遂に塔の頂上から身を投げて死んだ。今や不意打に次ぐ不意打が續けられ、是等のうちの一つである酷い戦がサアソから八哩離れたハーブスデイルで兩家の間に闘はれた。争闘は執念深く慘虐なものであつたが不得要領なものであつた。

十五世紀の中頃ガン家の家長は、クリスの城に豪華な生活をしてゐたジョーデであつた。根深い鬭争に飽きて彼とケイスの家長は、十二人の騎手を傍に聖テア禮拜堂で會見することに同

意し、それを有諷的に決定したのである。これが一四六四年のことであつた。ケイスは各々の馬に二人宛のつた、廿四人の者を連れてきてガン家の者を攻撃した。ガン家の者は死者狂になつて戦つたが寸断されて了つた。ジョーヂ・ガンは斬り殺され、武器と具足とブローチをはきとられた。間もなくガン家の親籍のウキリアム・マケイムスがドルメイで十人の家來を率いて、アカーヅルのジョーヂと彼の息子を殺した。主長たる地位は五代目の家長の子供から傳はつてきたライヴエスのガン家の家系に屬するものと考へられてゐる。

マクベス



この名は十一、二、三世紀のスコットランドの歴史に非常に屢々現はれる。マクベス（又、同時代の年代記にはマクベサード、マクフィンレーグ等とも云はれる）はスコットランドの王であつた。彼は一〇四〇年に王座に上り十七年の間統治して居た。彼は父フィンレーグからモレイ地方の支配權を繼承した。彼の妻はケネス三世の息ボエトの

娘なるグルオクで、彼にスコットランドの王座に就く可能性を與へたのは事實である。

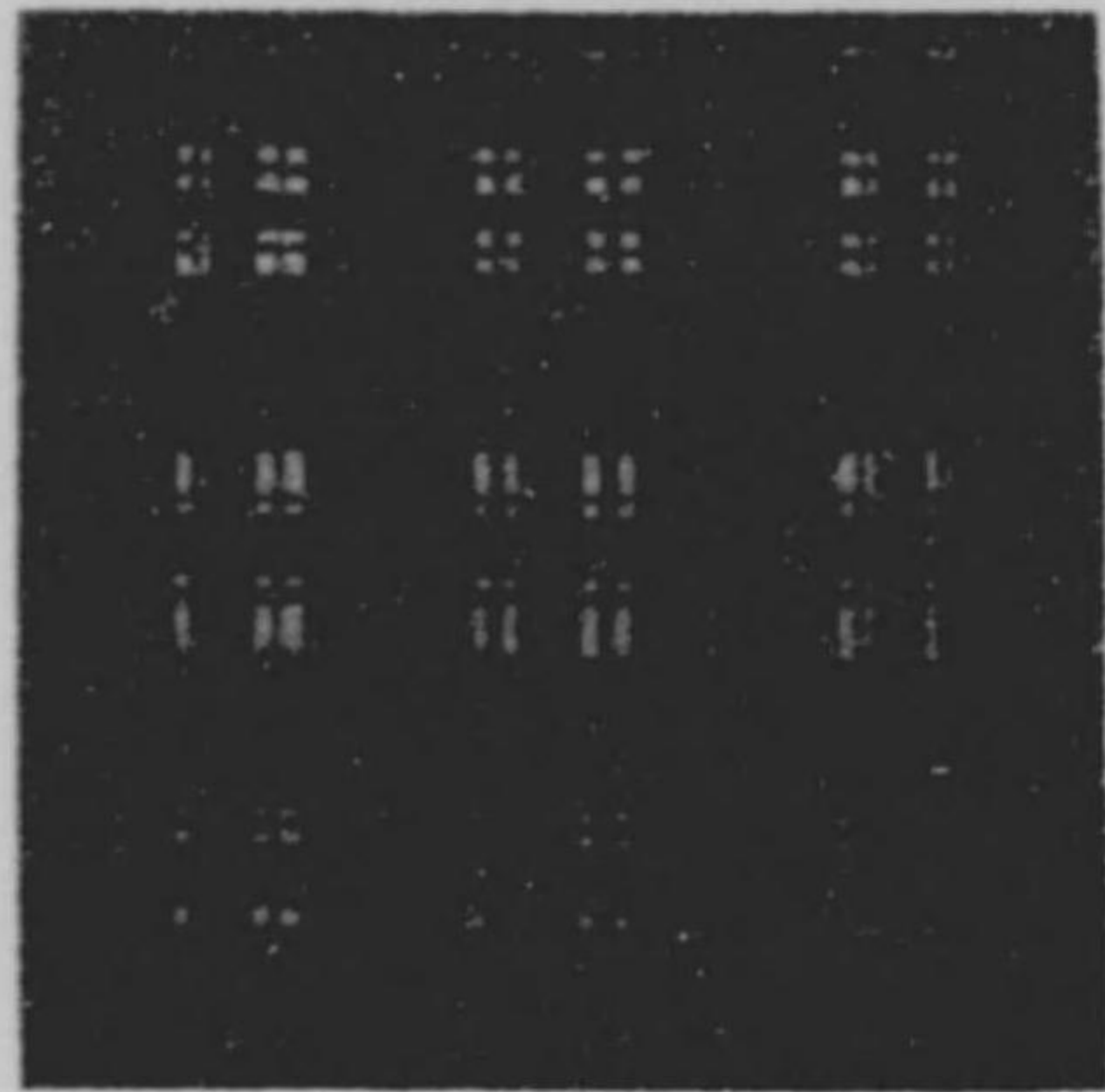
彼はその前主ダンカンを破り、斬り殺した。彼は一〇五六年十二月五日にアバーデインシエアのラムフアナンで殺された。彼の遺骸はアイオナの數世紀間續いたスコットランド王の共同墓地に埋葬された。彼の次には甥のルウラツクが王座についた。

二つの學識ある家柄がヘブリダーン島で十六―七世紀に醫業を開業した、その名はマクベスとベイトン（又はベサン）であつた。そしてこの二つの名前は十七世紀か十八世紀頃英語のピートンと云ふ一つの姓に合併された。名前と職業の似てゐることが、このことを容易くした。マクベスはアイレイとマルで醫業を營み、ベイトンはスキイに於て有名であつた。マクベスはアイレイの博學なる博士で、醫者としてばかりでなく、學問でも有名であつた。彼等は島のマクドナルド家の世襲の醫者であつた。マル・マクベスはダートのマクラーンの醫者であつた。その他は醫學のマスター・オヴ・サイエンスを持つてゐるマルのヘニクロス、Fergus m'Veaghで今はエディンバー大學で、價值ある系圖學の講義をしてゐる。他のベイトン家は十七世紀のスキイの大家で、彼等は眞のベイトン、即、ファイルフシエアから出た、ベエサンであると主張

する権利を有してゐる。

マクドナルド氏族

徽章——普通のひーす



この氏族は十二世紀の島のサマレットの孫、ドナルドから出たと主張するスコットランドの氏族の中では最も古く最も有名なもの、一つに數へられてゐる。サマレットと云ふ名はノールウェイ語の *Sumaridhi* で水夫と云ふことである。彼は一一六四年に死に、サデル僧院に葬

埋された。彼はドガル、レチナルド、アングスと云ふ三人の子供を遺した。南島とアーガイルの一部は次の様にして、サマレットの子孫たちに分けられた。ローン、マル、ジュラ等はドガルにキンタイアとアイレイはレチナルドのものとなり、一方アランの一部と共に、ビュトとアードナマカンからグレネルグに廣がる荒地がアングスに譲られた。サマレットの子レチナルドは一二〇七年に死んだ。彼には妻、モレイ伯の娘フォニアに依り、ドナルド・ロデリック・ドガ

ルと云ふ三人の息子があつた。ドナルドは南キンタイア・アイレイ及他の所有地の領地たる資格を父から嗣いた。一方ロデリックは北キンタイア、ビュト及アードナマカンからグレネルグに至るガーモランの土地を貰つた。これ等は總てアングス・マクサマレットの所有してゐたものである。

レチナルドの息ドナルドからこの氏族は名前をとつた。この頃か、この少し後に、高原地方に、父系的に、この名前をつける者が入つてきた。ローランドでは、この名が世襲的に用ひられてゐたのである。

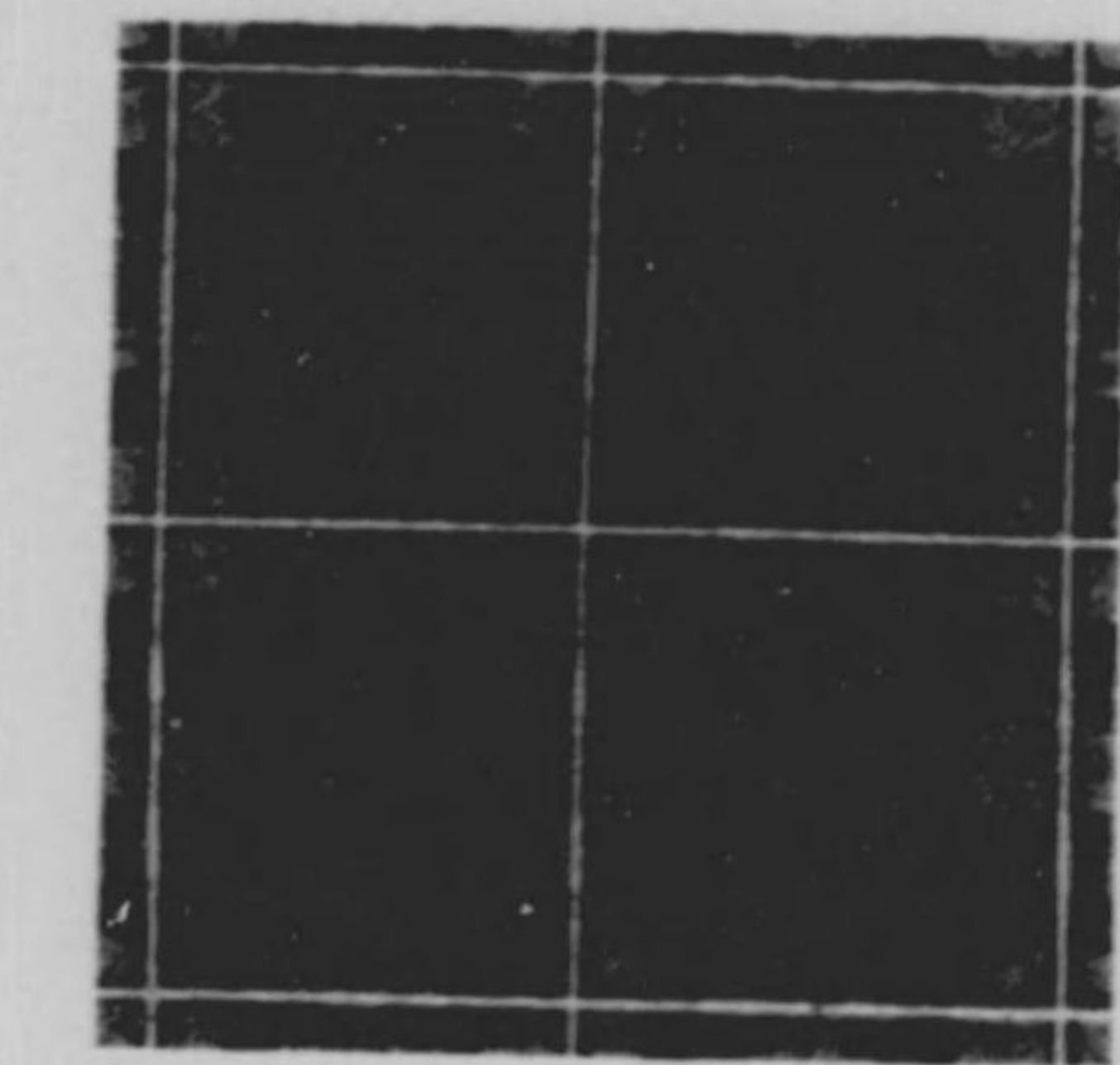
ドナルド以後サマレットの傍系的な分家は多かれ、少かれ相互に獨立してゐたので、混亂を避けるため、マクライリ、マクドガル、マクアリストア等の如き、父系的の名が定められた。十四世紀の中頃以後にはサマレット家から、新しい分家が出たと云ふ記録はない。主長の家の父系的な名は「島のマクドナルド」と云ふのである。ドナルド家の家長たる地位は、三つの分家（克蘭レナルド、スリイト、グレンガリイ）の各に要求する権利があるが、總てアペイア

ンスの家が保持してゐる。

ゴードン氏族

鯨波——ア・ゴードン、ア・ゴードン

徽章——ツタ（常緑樹）



この姓は地方的なものである。吾々の知り得る初代ゴードンの明な痕跡は一一五〇年と、一一六〇年の間にケルソの聖メリイの僧から土地の一部を與へられたベルウイクンシエアのゴードンの男爵領の領主であつたりチャードである。ロバート王ブルースの時代にゴードン卿サーアダムは、アバーデンシエアのストラスポギイの領主たる資格を許され與へられた。彼の曾孫サー・アダムは、セトンのセトン氏の二男、アレキサンダーと結婚したエリザベスと云ふ一人子を殘して、一四〇二年の戦に殺された。エリザベスの一人息子アレキサンダーは、一四四九年にハントロイ伯爵を授けられた。二世伯ジョージは四人の息子を殘した。二男のアダムはスザランド伯夫人エリザ

ベスと結婚した。一五九九年に六世ハントロイ伯は侯爵を授けられた。四世侯は一六八四年にチャールス二世から、ゴードン公爵の稱號を與へられた。五世公ジョージが一八三六年に死んだので稱號は止んだが、ハントロイ侯爵の位は、ジョージの直系にしてジョージの四男、ハントロイの二世侯アポイン伯爵に移つた。一六八二年に授けられたアバーデインの伯爵は、ハントロイ伯爵の従弟メスリツクのパトリックゴードンから出て、一四四五年にアナブロスの戦に斃れた。彼等は後にメスリツク・ハツドの領主として起つた。ゴードン高原聯隊と名づけられた二つの聯隊が此の氏族から起つた。最初のものは一七七七年に組織され一七八三年に解散した。二度目のものは第九十二又はゴードン高原聯隊で、一七九四年に出來た。ゴードン高原聯隊が出來たので、ブラツク・ウオッチ肩掛フレイドに黄色い筋を加へて彼等の聯隊用となし、それ以來、ゴードン家は盛装の時以外はハントロイ・タアタンを用ひることをやめた。

フレイザ氏族

徽章——イチキ（水松）

フレイザ家はノールウエイの出ではあるが、眞の高原氏族の地位を獲得した。

その名は Frazel, Freser, Frezd 等種々の綴り方があり、フランス語の Freze (苺) と云ふ語と関係がある。七枚の苺の葉がフレイザ家の紋章を形づくつてゐるのである。フレイザのギルバートが紀元一一〇九年アレキサンダー一世の御世に、ゴールドストリイム修道院の許可状の證人であることを知る。オリヴァー城のサー・シモン・フレイザはエドワード一世に依りロンドンで殺されたが、彼の弟アレキサンダーはその家の血統を嗣ぎ、それは高原地に於て地位を確保した最初のフレイザであつたやうである。

彼の孫は一三三三年にハリドン・ヒルで斃され、最初にロヴァアツトの家を起し、ノツク及フオヤーのフレイザー家の始祖となつた息子を殘した。此の家の六代目で、ロヴァアツトの二代目であるヒューは一四六〇年頃、ジエムス一世に男爵を授けられた。十一代目ロヴァアツト卿なる、シモンは一七四五年のジャコバイトの叛亂に深くひきこまれた。

彼の稱號は喪失した。その稱號はフレイザ及ストライクンの主長トマスが、ロヴァアツト卿を授けられた。一八三七年にイギリス貴族として復活し、シモンフレイザから二十一代世繼の家長となつた。

ロヴァアツト卿は一八七五年に死に、現在のロヴァアツト卿シモン・ヨセフ・フレイザK・Tなる次男を生んだシモンと云ふ彼の息子に繼承された。シモンは一八八七年に死んだ。レッドクルン従男爵フレイザはアレキサンダーと云ふ父を通じて、初代ロヴァアツト卿から出たのである。

サルトンのフレイザは、同名のアレキサンダー・フレイザの次男、ウキリアムから出た。此の家の第九世、サー・アレキサンダーは彼の甥サルトン卿が、一六六九年に子なくして死んだので、サルトンのアバーネシイ卿なる祖父ジョージの血統の嗣子となつた。その後裔アレキサン

ダーは、今の十八世サルトーン卿である。

第四十二王室高原聯隊

この立派な聯隊の起源は、一七二五年まで溯つた時代である。スコットランド北部の高地は、その頃不安定な状態に在り、政府は國を護る手段として高原の人達を使ふと云ふ考へを抱き、この目的のために六個の中隊が編成された。

兵卒は總て相當な家柄の人々で、ロヴァト卿、キヤムベル・オブ・ロヒネル、グラント・オブ・バリングダロツク、キヤムベル・オブ・ファイナブ、キヤムベル・オブ・キヤリツク、ムンロ・オブ・カルカアーン等の如き、知名な人々に指揮されてゐた。彼等の義務は一七一六年の「武装解除命令」を遂行すること、掠奪を妨ぐことに在つた。一七三五年に政府はその數を加へることに決し、五二五人から千人に増した。此の時代まで各中隊は、その指揮官に依つて選ばれたタアタンを着てゐたが、中隊が今や一個聯隊に編成されるやうに

なつたので、制服を定めることが必要となつた。最初の聯隊長クロフォード卿は、ローランダアの人で自分のタアタンを持つてゐなかつたから、他のごんなのとも違ふ新しいタアタンが、その聯隊のために作られた。これは遂に有名な第四十二番、又は、ブラツク・ウオツチとなつた。

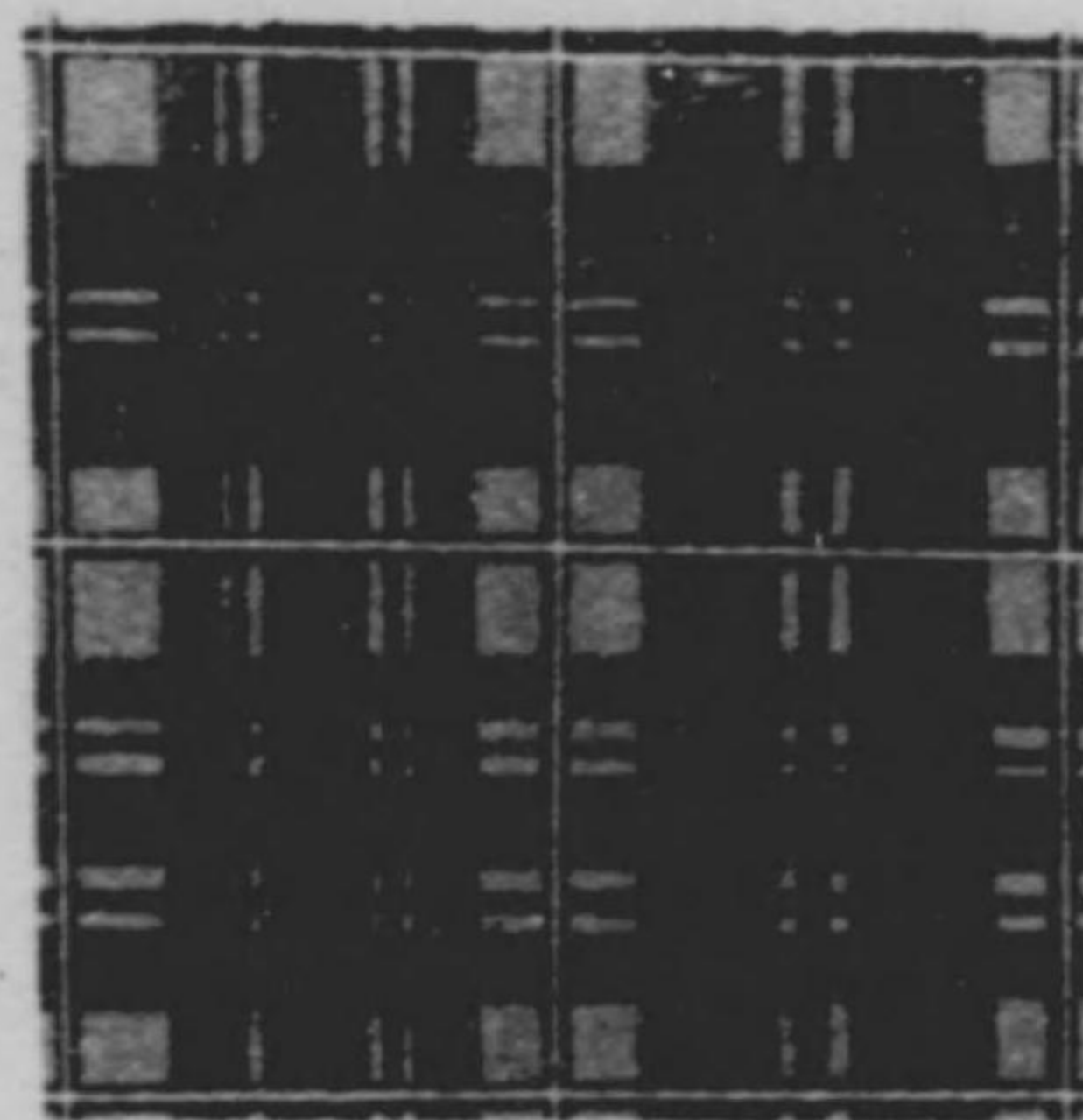
正規兵は、その制服の色から赤兵と呼ばれ、高原の者は、その黒すんだ衣服から黒番兵と呼ばれた。その編成以來ブラツク・ウオツチは、それが參加した殆、全ての戦に於て輝しい役割を果し、總る場所で名譽を持つて戦つた。一八八七年に記念の石碑が、ブラツク・ウオツチのために、アベルフェルデイの近くのテイ河岸に建てられた。

それはゲイリツク語と英語で、一七四〇年五月に最初の閲兵を、テイブリツヂの近くで行つた、第四十三聯隊(後に第四十二王室高原聯隊)に合併された六個の(後に十個に増された)中隊が、高原の總る部門に於て勤務したる後、一七三九年にテイブリツヂに集合したのを記念するために「建てられたと書いてある。

フオブス氏族

鯨波——Linnoch (ストラス・ドンの山の名)

徽章——えにしだ



此の氏族は、アバーデンシエア教區のフオブスから、その名を採つた。スザランドシエアのマケイを以て、普通の家系と考へられ、又 (Clann Mhorquin) モーガン氏族として知られてゐる。最初に記録に表れたる、ジョン・オブ・フオブスは、ウキリアム・ザ・ライオンの時代に於ける重要な人物であつたやうに思はれる。彼の名は一二三六年付け、ビュヒアン伯爵アレキサンダーの許可狀に現れてゐる。彼の息子アレキサンダーは、一三〇三年エドワード一世に反抗して、オウ・アークハート城を護つてゐた時命を失つた。彼はアルス・アレキサンダーと云ふ子息を残したが、一三三二年にダブリンの戦で斃れた。その死後に生れた同名のジョン・フオブス卿は四人の子息を持ち、その三人の子供から、ピツリゴ、カロデン、ウオタアトン、フオヴェランのフオブ

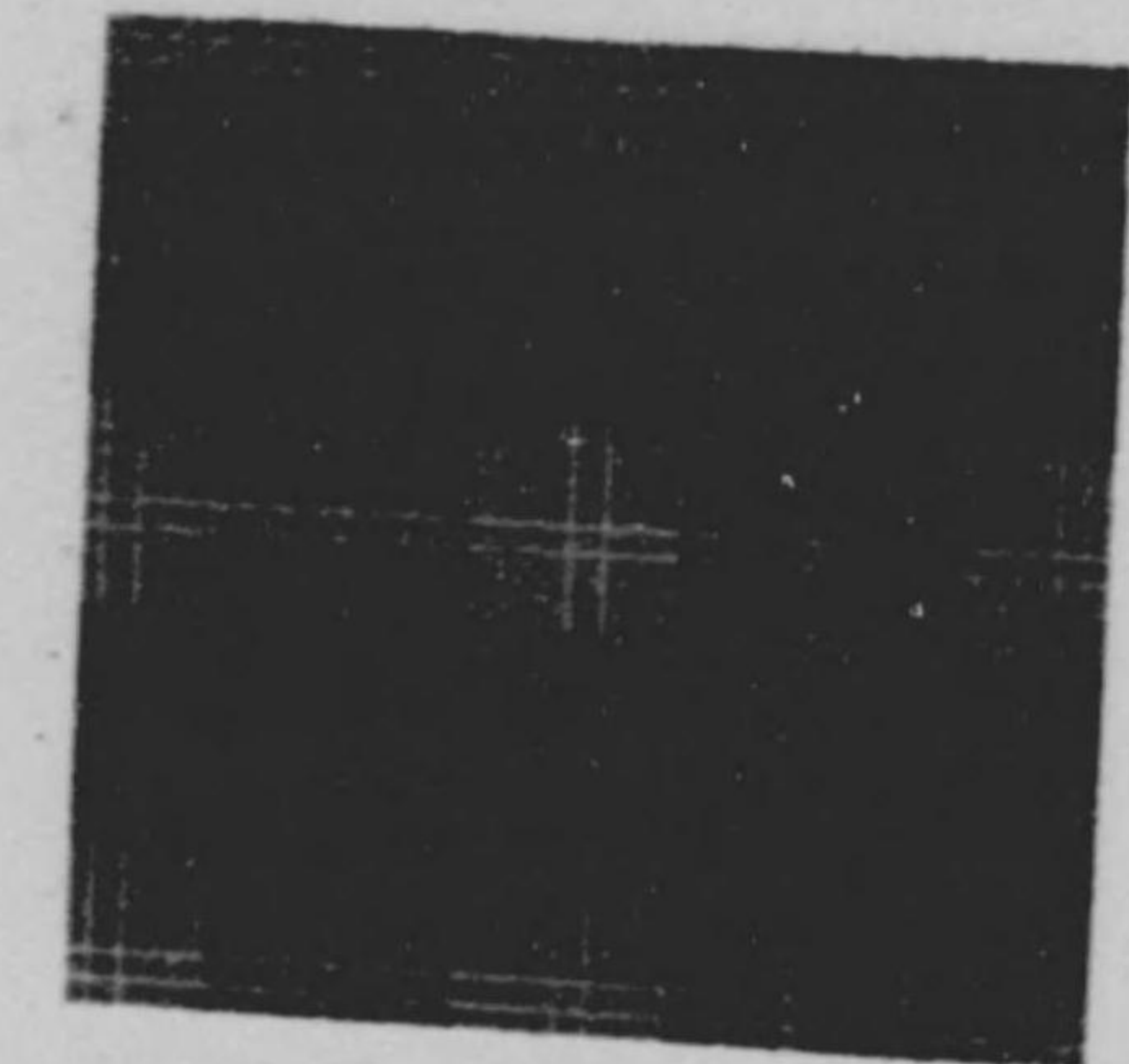
ス家が與つた。彼は一四〇六年に死んだ。彼の長男アレキサンダーは、フオブス男爵としてジェムス一世に依り貴族に列せられた。二世フオブス卿ジェムスは三人の息子があつた。三世卿ウキリアム及コーシエンダアと、モニマスクのフオブス家の始祖ダンカント、今はセムビル卿となつてゐるが、クレイ・ジイヴァ従男爵でフオブスの先祖パトリックがこれである。エディングラスのフオブス家は、一四二〇年にその地位を得た非常に古い分家のトルーンのフオブス家と、カロデンの領主の先祖との分家である。クレジイヴァの八世従男爵サー・ウキリアム・フオブスは、一八八四年にセムビル卿として彼の親類を嗣ぎ、そして順序に従つて、彼の長男サー・ジョン・フオブスセムビルに依つて一九〇五年に繼承された。故、W・フオブス・スキーン博士が、エルフィンストン・ダルリンプル氏に與へた報告に依ると、現在のフオブスのタアタンは、一八二二年にピツリゴの家のために、デザインされたと云ふことが確められた。

それは只、^{フオバイ・セカン}第四十二タアタンに白線を加へたのみであつた。この日より前はフオブス家はハントリイ・タアタンを着るものと思はれてゐた。マケイのフオブス氏族と、怪物のやうな熊

に殺されたと云はれてゐる、有名な狩獵家から始つたアークハート家の間には傳説的な關係があるのである。

チ・ザム

徽章——羊齒



スコットランドに於けるチザム家の最初の痕跡は、ロクスバーク・シエアの西にあることが発見された。この氏族はノールウェイの出で、パーウィツクや、ロクスバークのチザム家は、イギリスのテインデイルからきた。

そして次第に「De Chesé」「de Chesholm」「de Chesholm vel Chesholme」と呼ばれた。

最初に國境に地位を占めたのは、ロクスバークシエアのチザム従男爵であつた。十四世紀にサー・ロバート・ド・チザムはスコットランド高原にきて、クオレル・ウツドのサー・ローターと云ふアークハート城の城主の嗣娘と結婚した。彼はローターと北部の土地を嗣いだ。北部

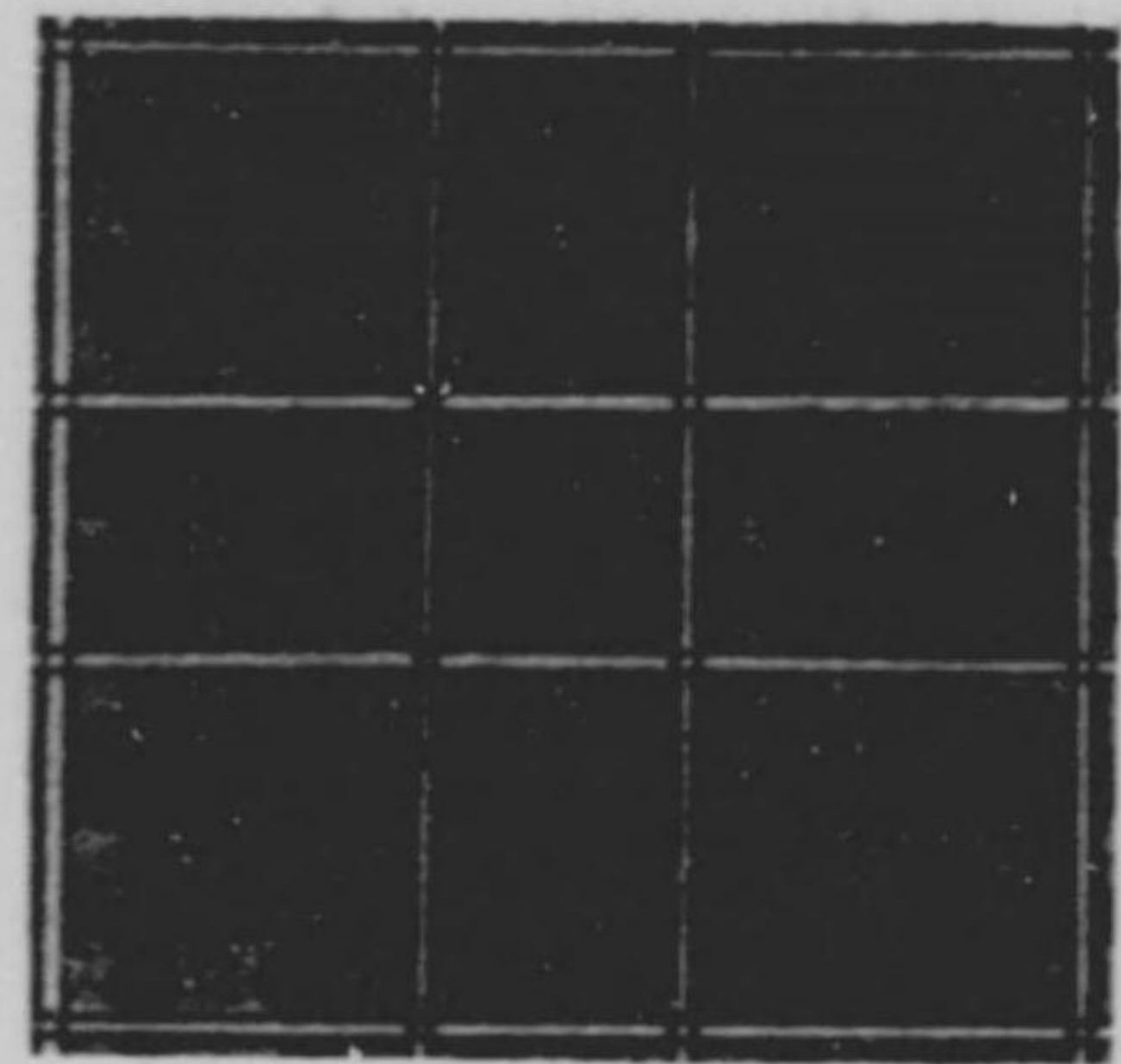
のチザムは富や家來が次第に多くなり、國境の家から分離して獨立した勢力を持つてゐた。北部チザム家（又は、ストラスグラス・チザム）は六百年以前フオファー・パース、アバーディン、モレイ、インヴァネス、ロス、スザーランド及ケイスネス州の土地を所有してゐた。が、今は之等は主長の家から離れて了つたけれど、彼等の領地はインヴァネスとロス州にある。アークシス城が、數世紀間續き、今尚居るその住居である。サー・ロバートとその後裔は、一八八四年迄、その土地を男系の者が保持してきた。然し、一八八四年、時の主長ジェムス・スザラントと、その嗣子は一八四八年法（限定相続法）を利用して、彼等だけで土地を所有すると云ふ理由で、世襲財産に異議を申立てた。この異議はそれ程理由がなかつたので、所有地は相続人なるアレキサンダー（十二世）の孫、ジェムス・ゴードン・チザムに歸された。

一八八七年にロデリック（十二世）が未婚で死んだ後、この土地は信託の形式で、相続人の家を離れて、ジェムスの未亡人と娘に移つた。この時チザムの男系の相続人なる主長は「チザム」と稱せられた。この時のチザムは、オーストラリアに七年以上定住して、スコットランドにや

つてきた、ジョンチザムの四男アレキサンダーである。

チザム家の主長は、高原の族長の中で「ザ」と云ふ接頭字をつけられた只一人の人である。

ロヒールのキヤメロン家



キヤメロン氏の最初の領土は、上官としてロド・オブ・アイル島の領主に保持されてゐたロツキイの湖と河の東岸ロツクアーバーの一部に制限されてゐた。もつと近代のこの氏族の領地は、その前の時代には、アイランド島の領主からレナルド氏族のマクドナルドに、ロド與へられてゐたこの湖と河の西側のロヒールとロツカーガイルである。この邊にはマクドナルドの子孫が、長い間住んでゐたのである。ロヒールの古代の住居は十六世紀の始めに、ロヒールのユーン・キヤメロン（八世）に建設されたトア城である。その城は、アクナカリイに己れの邸を建てたロヒールのサー・ユーン十七世（一六二九—一七一九）の時までこの家の邸宅であつた。

その邸は一七四六年アクナカリイが、カロデンに次いで侵略され荒廢に歸せられて了つた時に焼き拂はれて了つた。アクナカリイは廿世紀の始めに再建されたが、一八三七年になつて始めて完成した。ロヒールのキヤメロンの方が、上位に指命されてゐるにも不拘、マクギロニイのキヤメロン氏が一般に最も古い家柄であると思はれてゐる。一四九二年に、ロヒールのキヤメロン氏の家長は、キヤメロン氏族の主長であると證せられた。一五二八年に王は彼の土地を總て、ロヒールの男爵領とする許可状を與へられたが、その中でこの氏族の主長は始めて「ロヒールの」と指命された。その後この家の主長は「ロヒールの」キヤメロン氏となつた。

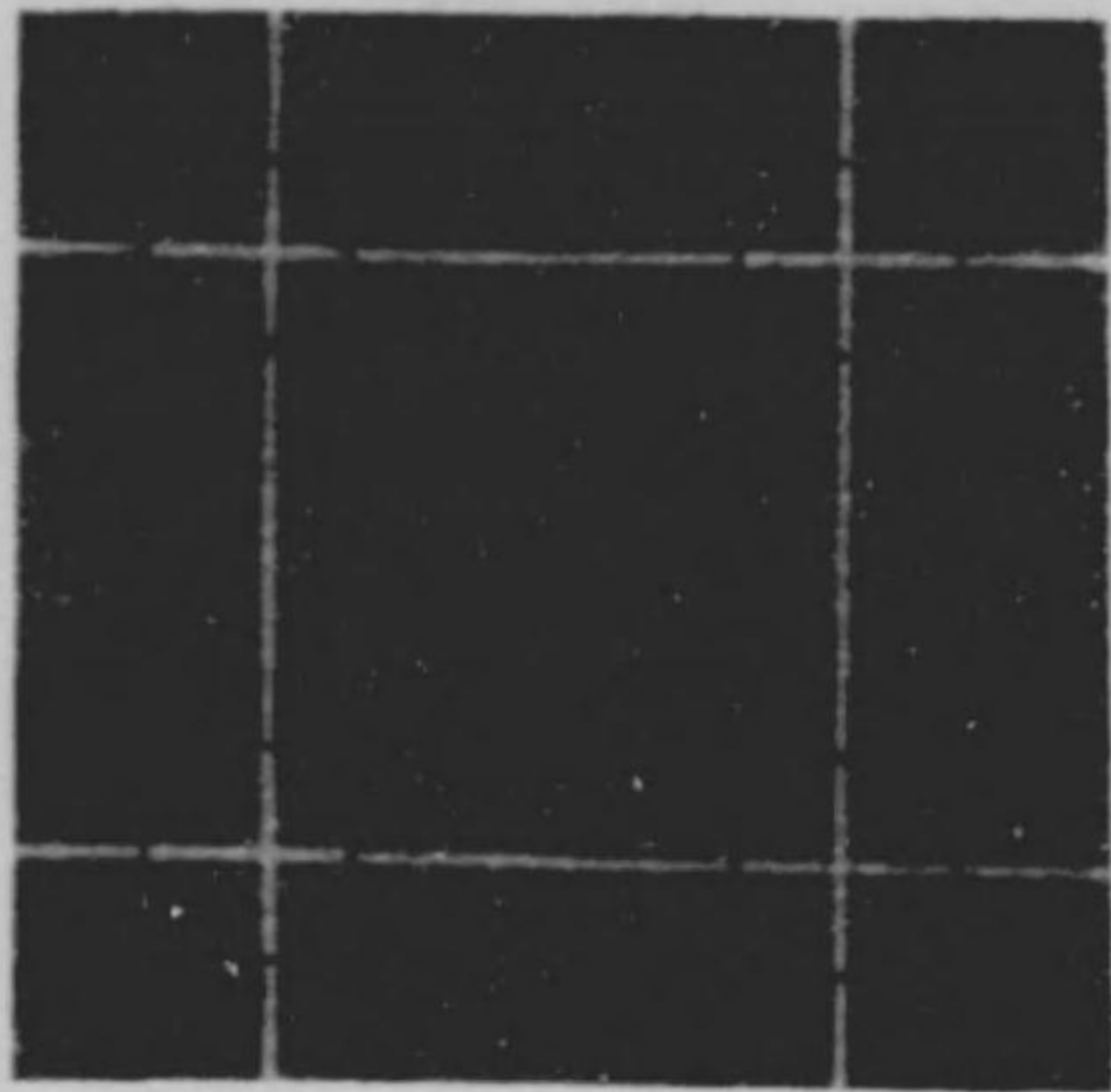
以下は主長の武器に就いての叙述である。

二條の紅色の線、又は五本の矢の束を紅色の帯で束ねた飾章。

ヒット標語——「ユナイト結合せよ」楯の下の區切りには Pro Rege et patria と云ふ語が刻んであり、徽章

の周圍には二匹の猛獸が頭で環をつくり、その真中に櫛の枝があつて、各この獸は外側の手に相傳のロツカーバー斧を持つてゐる。

エラクトのキヤメロン家



この家は地方的には、(Siochd Eoghairic Eoghain) 即ちユーンの子供達又は「ユーンの後裔」として知られてゐる。初代の代表はユーンと、その二度目の妻、マージヨリイ・マキントシユの間に出來た子、ユーン・キヤメロンであつた。エラクトの二代の領主ドナルド・キヤメロンは、一七一五年の反亂の少し前に生まれた。二十年許り後彼はプリンス・チャールス方に参加し、ロヒールの下で、歴史的なグレンフィンナの戦で、キヤメロンの第二の指揮官となつた。カロデンで敗れた後、エラクトのキヤメロンは三年間と云ふもの家もなく、山々をさまよひ歩いてゐた。

彼はモヴァンのドリムニンの娘と結婚し、四人の子供を得た。その長男は後にエラクトのサー・キヤメロン K.C.B. となり、第七十九(即ちキヤメロン高原) 聯隊を起した。彼は司令官陸軍中佐に任命され、事が西印度に關係するまで、フランダースに於ける一七

九四——一七九五年の烈しい戦争に、第七十九聯隊を指揮してゐた。一七九七年に軍隊は解散し、内二百十名は第四十二聯隊フランク・ウオッチに参加した。キヤメロン大佐とその部下は高原地方に赴き、一七九八年には七八〇人からなる、第二の七十九聯隊を起し、一八〇四年に又もや八〇〇人からなる軍隊を遣へた。壁地に於て多く軍務に服したる後、彼は現役から退いて一八二八年にフルハムで死んだ。

「エラクト・キヤメロン・タアタン」として知られてゐるものはアランの母である、エラクトのキヤメロン夫人に依つて特に、第七十九キヤメロン高原聯隊のためにデザインされたものである。

この、キヤメロン夫人(アランの母)は、ケボツクのマクドネルの娘であるが、彼女はマクドナルド家とキヤメロン家のタアタンを混合して、新しくタアタンを作る困難を解決し、又この事に依つて兩氏族の感情は結ばれたのである。

マクダフ氏族

徽章——黄揚^{つげ}又は、赤こけもも



マクダフは、ファイフの初代のケルト伯爵の父系の名である。マルコルム・キヤムモア王の息エセルレッドが、最初に記録されたファイフ伯爵である。彼は又ダンケルドの僧院長でもあつた。コンスタンティンは、初期のデヴィド時代のファイフ伯爵であつた。彼は一二九九年頃死に、彼の兄弟であると思はれるダンファガンのダフの後裔ギリマイケル・マクダフに依り繼承せられた。この三人の伯爵の出は不明である。が、その家系がリユラツク王及マクベス王が「マクダフ氏族の家系」の頭とされてゐることを示してゐるのは重大なことである。一定の特典がダフ氏族に許與され、一三八四年の決議書に於て言及されてゐる。之等の特典は一、即位式の日王が、彼等を宮室の椅子に座らせること。二、王室が戦争をする時、その先峰をつとめること。三、ニュウバークの北に建つてゐる、クロスマクダフの避難所で一定の辨

償金を支拂へば、殺人の罪を免れることである。

ギリマイケル・マクダフは、彼の息ダンカンに後を嗣がれ、再び彼の息ダンカンに五世伯を嗣がれた。ダンカンの子マルコルムは彼の甥のマルコルムに繼承された。このマルコルムは二人の子を生んだ。即ち、一人は彼の嗣子コルバンで（クリスチャンネームはない）エドワード一世に對抗して最初に謀反を起した人である。も、一人は十一世伯ダンカンで一三五三年に死に娘を残しただけであつたので、ファイフのケルト伯爵家は絶へた。パンフシエアのダフ氏は、ファイフ伯爵たる要求をなした。パンフシエア、マルダヴィトのデヴィド・ダフは要求された^{クレイム}如く、ファイフ伯の出であることは大體確であるし、又その後裔は、一七五九年にマクダフ子爵及アイルランドの華族であるファイフ伯の稱號を受けたブレコ卿（一七二五）ウキリアム・ダフであると云ふことも考へ得る。四世伯ジエムスタフは一八二七年に、ファイフ男爵として英吉利の華族となつた。現家長は一九一二年にファイフ公爵として彼女の父を繼いだアレキサンドラ・ヴィクトリア・アルバータ・エドウィナ・ルイズ女王殿下である。

グラント氏族

徽章——松の木



歴史的にみれば、グラントの家長は疑もなくノールウェイの出である。名前も又、ゲイリツク語らしく見えるが、ノールウェイ語で、只佛語の Grand 英語の Grand が變化したにすぎない。スコットランドの記録に残つてゐる最初のグラントは、一二五八年のロオレンスとロバート・ラ・グラントである。サー・ロオレンスはインヴァネスの奉行で、ロバートはネアンシエアの土地を所有してゐた。ノルウェイ時代の此の家の名は、英吉利殊にリンカンとノッツに於て有名であつた。そこにはグラントの有名なノルマンデイの家があつた、そしてそのモットーは同じく「素早く立上れ」であつた。

最初のグラントの領土はストラセリツクで、彼等は十四世紀頃に其處に居たのである。フリユキイのジョン、グラントは、一四八四年にデスクフォードのオジルヴィの娘と結婚し、三人の

娘を残した。即ち、彼の嗣子でスイフイールド伯爵家の先祖ジェムスと、一五〇九年に男爵を授けられたジョンと、グレンモリストンとを與へられた(ジョン・グラントの私生兒)ジョン・ムアである。

同名のサー・ジョン・グラントと、彼の息フリユキイ八世卿は、スコットランド(オレンヂ)のウキリアム二世に歸依し、氏族の者と共にクロムデルバウズで戦つた。一七一五——一七四五年にハノヴァの家に住へたが、グレンモリスンはステュワート氏を離れた。

ルードヴィクと、スイフキールド伯爵ジェムスの娘マアガレットとの結婚に依り、その孫のサー・ルイズ・アレキサンダー・グラントの時に稱號が此の家に入つて來た。

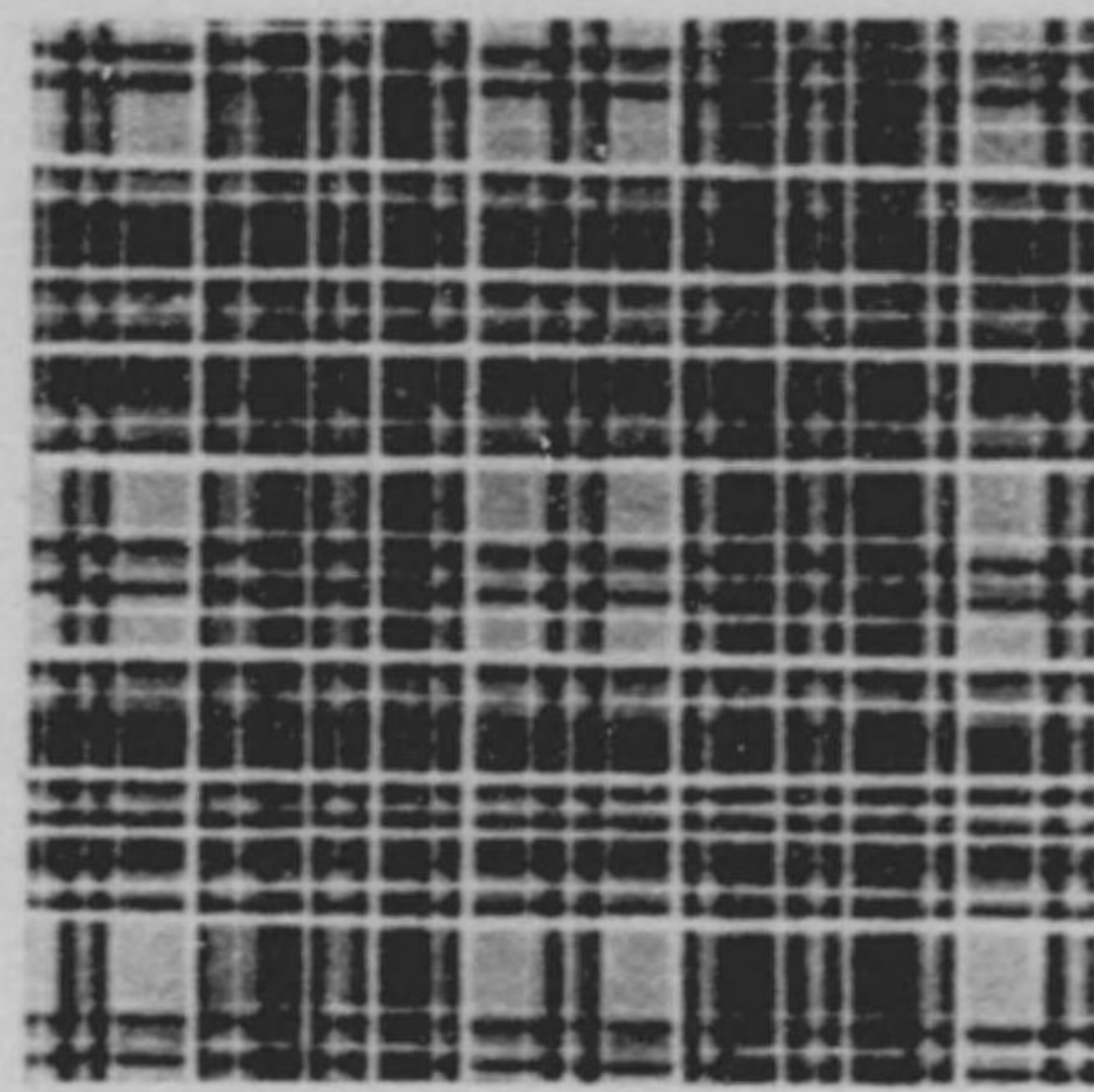
一六八八年にこの姓を持つ三つの従男爵があつた——即ち、一六八八年のゲルヴェイ、一七〇五年のモニマスク、一八三八年バリンダロツク(マクファアソン)が之である。第十一世スイフキールド伯は、一九一五年十二月十二日の實戦で受けた傷がもとで死んだ。そして先の伯爵の弟は、ストラスベイ従男爵と、グラント氏族の家長たる地位の兩方を失つてゐるのに引換へ、彼は己の娘オジルヴィ・グラントの、ニイナ・キャロラインをスイフオールド女公爵として

彼の爵位を嗣がせることに成功した。

ジャコバイト

ジャコバイトとは、一六八八年に立つたステュワート家の與黨に對してつけられた名で、一七一五年及一七四五年に興つた者より特に、又は明に人々に同情されてゐた。

スコットランドの北部の者は、ステュワート家の者に同情されてゐた。そして一七四五年に高原の氏族の多くは、ボニー・プリンス・チャールズと、カロデンの敗戦の後、忍んでゐた首領と共に立つた。ジャコバイト・タアタンが作られて、ジャコバイト黨の婦人や、紳士に廣く着られたことは不思議はない。此のタアタン、即ちこゝに示されてゐる縞柄は「ジャコバイトの表象として着られた」とスミス氏は云つてゐる。



吾々はそれを最も熱心な、ジャコバイトであつた婦人のために一七二二年に作られたこの縞

柄の絹のスカーフを、いまだに所持してゐるこの階級の婦人から手に入れた。一七一五年の叛起の前に、多くの秘密の記號や、印がジャコバイトに用ひられ、このタアタンもその一つであつた。疑もなく、大刀の櫛のS（ステュワート家のS）の透し細工や、その刀身のNO・UN

IONの銘の様な、他の秘密の政見の表徴として、採用され着られてゐた。

他のジャコバイト黨の徽章は、ジャコバイト文學に屢々引用される「白の帽章」である。

吾が愛し子は、アバーデインに生まれ

未だなき、美しき若者なり。

されど、今や吾が心は悲みに満ちあふる

吾が愛し子は白帽章ワイト・コケイドつけ戰場へでかけたるなり。

噫！ 彼は大刀にそりうたせ大言壯語す

噫！ 彼は元氣な美しき若者なり

何事が起らうと、^{ワイト・コケイド}白帽章つけたる吾が愛し子みれば

心は喜びにうちふるふ。

吾が愛し子にタアタン^{フイレド}肩掛け買ひやらんと

吾が靴下を賣り、紡車を賣る。

吾が愛し子に大刀、短劍、^{ワイト・コケイド}白帽章買ひやらんと

吾が靴下を賣り、紡車を賣る、………等。

ロガン氏、又は、マクレナン氏

徽章——はりえにした

マクレナン家の起源の傳説的説明は、以下の通りである。フレイザ家とロバン（又はロガン）家の間の確執で、ロガン家はケソック・フアリーの近くのドラムデーフィットの戦に敗れ、彼等の指揮官にしてギリゴームと呼ばれた、勇敢な勇士は殺された。ギリゴームは、フレイ



ザ家のうちに息子を残したが、その子が自分の父の仇を討つ程強く、且つ好戦的になるのを妨ぐため、フレイザに依つてその背中を碎かれた。この息子はクロテア・マギリゴーム（ギリゴームの背むし子）と云はれた。彼はビユウリイ・プリアリイで教育を受け、牧師職につき偶々西海岸に移り、そこへ彼は——一つはスカイのキルミア、他はグレネルグと云ふ二つの教會を建てた。これは十三世紀の始め頃のことであつた。クロテアは此の時代に屢々なされたる如く高原の僧として結婚し、彼が聖フィナンの御名の下に *Orille Finnein* と呼んだ、一人の息子と他の後裔を生んだ。そして、その後裔はマクレナン家として知られるやうになつた。マクレナン家は一時ロスシエアのキンマイルに多く居り、その後裔は一六〇〇年頃、キンマイルとグレンガリーの間の大争闘に顯著な役割を占めたドナルド・マクレナンと云ふ新な勇士の名を保持した。マクレナン氏は或事件に、キンマイル模範的助力者として名を表した。又一六四五年オルダンの戦に於て、ロデリック・マクレナンと云ふ人と彼の弟ドナルドは、彼等の家長の旗を勇敢に守りつゝ戦死した。LOBAN 又は LOBBAN と云ふのは、モレイシエアの名である。ウキリアム・ロバンは、一五六四年にブラック・アイランドのドラムデーフィットの住人とし

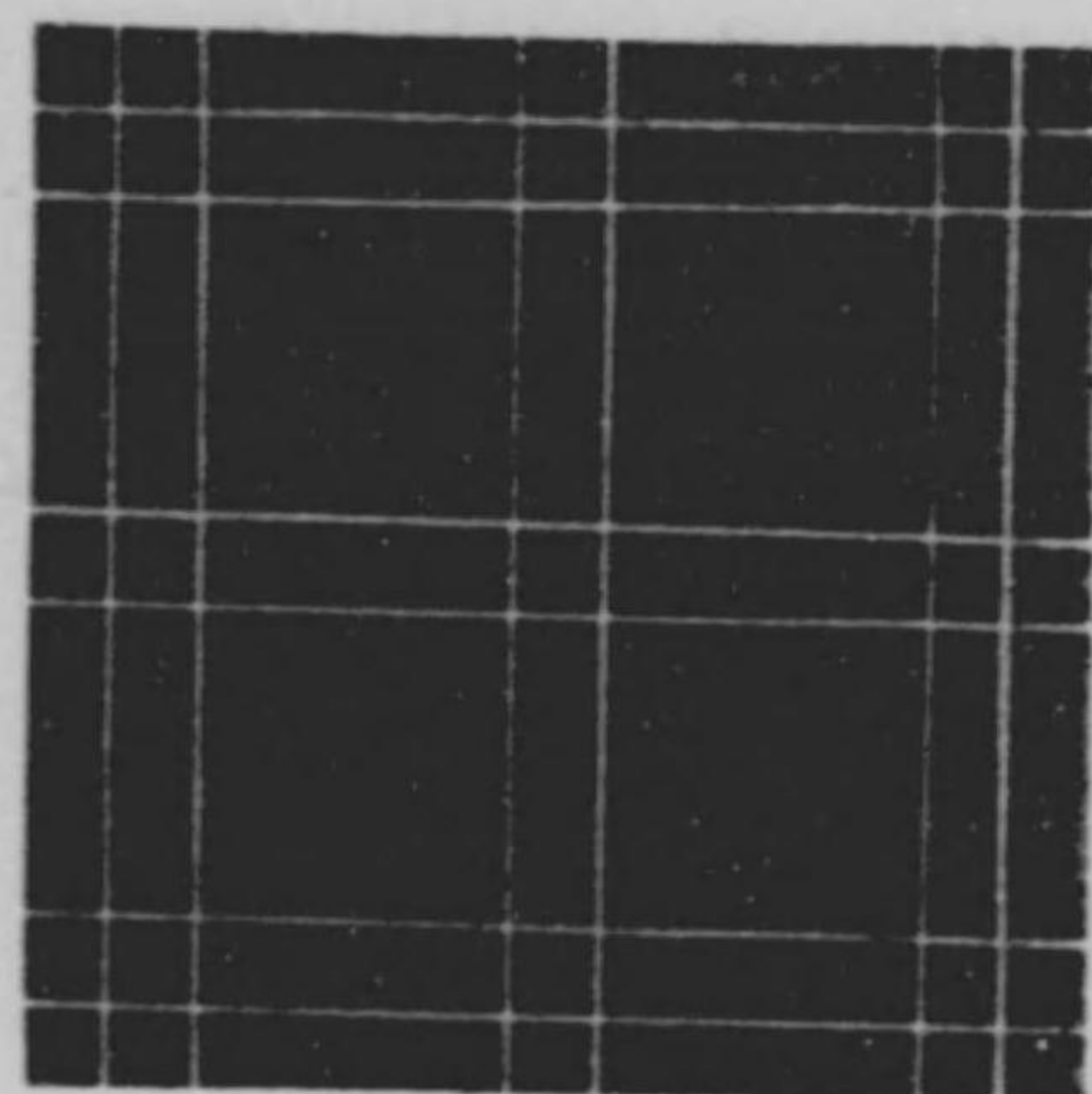
て名を知られてゐた。そして、その一家は、其處に非常に長い間住んでゐたので、「ドラムダ
ーフィットのロバン家程古く」と、その地方の俚諺に云はれてゐる位である。アレキサンダ
ー・マクベン博士は、「ロバンはゲイリック語の *Loban* 即ち石炭車か、橈籃の一種で、そこに
最初の語源があるやうに思はれる」と云つてゐる。

マカルバイン

徽章——松の木

アルピン又はアルバインと云ふ個人名は、ウエルズ語からきてゐる
が、それは、ストラス語やピクツ語からも、ゲイリック語へも入つて
きたものである。

スキインはその書「スコットランドの高原人」に於て次の如く述べ
てゐる。「シオル・アルバイン」と云ふ一般的な名稱は、普通相互に相當離れて位置を占めてゐ
るが、同一の家柄であると相像されるもの、即ち、スコットランド王の遠い血縁の先祖キニ



ス・マカルバインから出てゐる氏族に與へられたものである。是等の氏族は、ジョージ。グラ
ントマキノン。マクアリー。マクナブ及マコーレイの諸家で、彼等は常に高原の氏族の中では
最も高貴で、最も古いと云ふ卓越性を主張する権利を持つてゐた。「吾家族は王室の血統なり」
(*Is rioghail mo dhréam*)と云ふのが、マグレガー氏の誇るべき標語で、他の氏族の人々も數世
紀の間、その標語の正しさを納得してきたのであるが、この高い誇りも厳格な検討の前には、
顛覆せざるを得なかつた。と云ふのは一四五〇年に寫本の權威が、「マグレガーの起源は、
その時代には全然知られて居らず、又是等の氏族は實際は、ロス種族の一部から作られたもの
である」等、總る疑問を立てたからである。

主氏族は、グレガー氏族であると認められてきた。マカルバインが、古い出であると云ふこ
とはゲイル人の言葉「岡と流れとマカルバイン」と云ふのが、マカルバイン家の起りは、岡や
小川が出来たのと同時代と云ふ推論を支持してゐるのでも知れるわけである。

古代の紋章は、紅色で色どつた猪頭でアルバイン王が、殺されたのを暗に云ふ「アルバイン
の死を記憶せよ」と云ふ言葉がゲイル語で入つてゐる。主長たる地位は、アガイルシエアのダン



スタフナブにあると云はれてゐる。

昭和十二年五月七日印刷
昭和十二年五月十日發行

【非賣品】

發行所	東京市京橋區銀座西五丁目三番地
發行者	金 窪 安 三
印刷者	東京市京橋區越前堀二丁目六番地 大 軒 五 平
印刷所	東京市京橋區越前堀二丁目六番地 大 同 印 刷

東京市京橋區銀座西五丁目三番地
東洋編物工業株式會社

